



Data	2023-67
監督・脚本:	サラ・ポーリー
原作:	ミリアム・トウス『Women Talking』
出演:	ルーニー・マラー/クレア・ フォイ/ジェシー・バックリ ー/ベン・ウィショー/フラ ンシス・マクドーマンド/ジ ュディス・アイヴィ

👁️👁️ みどころ

“大阪のおばちゃん”のおしゃべりは有名だから、『ウーマン・トーキング』とはそれ？いやいや、「私たちの選択」というサブタイトルを見れば、本作はもっと“重い”はずだ。現実起きた“ある事件”を題材に、女流監督がものすごい問題提起作を！

時代は？舞台は？あるキリスト教一派の村の統制は？そんな前提を理解した上で、赦す派、闘う派、去る派、の三派に分かれた十数名の女たちの白熱した議論の展開は如何に？

舞台劇のような本作の迫力は十分だが、論者が多すぎることで、議論が難解すぎるのが難点。さらに、闘う派の闘い方、去る派の去り方、という具体論が見えないのも私にはつらい。

それはともかく、モーゼの“出エジプト記”を彷彿させる本作ラストをあなたはどうか考える？



■□アカデミー脚色賞をゲット！作品賞も候補に！■□

日本では必ずしもアカデミー賞のノミネート作や受賞作を結果発表前に見ることができず、発表後にやっと見ることができるケースも多い。第95回アカデミー賞でブレندان・フレイザーが主演男優賞を受賞した『ザ・ホエール』（22年）がそうだったし、アカデミー6部門にノミネートされながら、7部門を受賞した『エプエブ』こと『エブリシング・エブリウェア・オール・アット・ワンス』（22年）『シネマ52』（12頁）に、主演女優賞をはじめ、その多くをさらわれてしまった(?)『TAR ター』（22年）もそうだった。

それと同じように、第95回アカデミー賞の作品賞と脚色賞にノミネートされ、脚色賞を見事ゲットした本作も、日本では6月に入ってやっと鑑賞することができた。『生きる

LIVING』(22年)、『シネマ52』36頁)や、『トップガン マーヴェリック』(20年)、『シネマ51』12頁)等の他の候補作4作を抑えての受賞だから立派なものだが、原題を『Women Talking』、邦題を『ウーマン・トーキング 私たちの選択』とする本作は一体何の映画?原題だけだと、単なる「女たちのおしゃべり」と誤解されるかもしれないが、邦題のように「私たちの選択」というサブタイトルがつくと、やけに重そうに……。

■□■時代は?舞台は?原作は?監督は?■□■

本作の時代は2010年。舞台は、あるキリスト教一派の村。そこでは見渡す限りの畑と響き渡る子どもたちの遊び声、そして祈りと信仰が支える穏やかな日常が特徴だった。キリスト教に疎い私たち日本人には、21世紀の今、そんな“キリスト教一派の村”があることは想定しづらい。しかし、ミリアム・トウズの原作『Women Talking』に基づいて、『アウェイ・フロム・ハー 君を想う』(06年)、『シネマ20』82頁)で鮮烈なデビューを飾った女性監督サラ・ポーリーが自ら脚本を書き、監督した本作は、実際にあった事件に影響を受けているらしい。その事件とは、2005～2009年にボリビアで発生した、キリスト教の教派メノナイトの女性100人以上が数年にわたりレイプされていたという事件だ。2011年に詳細が明らかになった同事件では、被害女性たちは動物用精神安定剤などを調合したスプレーをまかれ、被害は悪魔や幽霊のせいになされていたらしい。また、女性たちが被害を訴え始めた時、他のメノナイトたちは「女性たちの馬鹿げた想像」だと批判していたらしい。メノナイトは電気や自動車などを使わず、一般的な社会から隔離されたコミュニティを築いていたため、女性や子どもたちの性暴力が問題にされることもなかったし、女性が加害から逃れようとする機会も少なかったようだ。したがって、この事件は宗教コミュニティにおける性暴力の深刻さに光を当てたものになった。

そんな実際の出来事に発想を得てカナダの作家ミリアム・トウズが書いた原作を、自分自身が10代の時に受けた性被害を当時は告発できず、大人になってからエッセイで告発した体験を持つサラ・ポーリー監督が映画化したわけだ。パンフレットにあるイントロダクションによれば、サラ・ポーリーは「壊れた世界をいかに立て直すかという話し合いが持つ、終わりのない潜在的な力と可能性を、全てのフレームで感じたかった」と語っているが、さて本作でその意図の実現は……?

■□■『どうする家康』は二択、司法試験は四択。本作は三択■□■

現在放映中のNHK大河ドラマ『どうする家康』では、タイトル通り、若き日の軟弱な徳川家康の選択肢が毎回提示されるが、それは常に二択。つまり、基本的には戦うか、それとも逃げるかの二択だ。他方、司法試験の短答式試験は昔から四択だから、当然その選択は難しくなる。それに対して、本作で女たちが迫られる選択は三択だ。それは、①赦す、②闘う、③去る、の3つだが、今なぜそんな選択が必要なの?

本作の舞台は“あるキリスト教一派の村”としか示されないが、原作やその題材とされ

た歴史上の事実を知れば、女たちが大きな納屋に集まって協議していることの意味がわかってくる。ある晩、寝室に忍び込んできた青年に気づき、少女が声を上げたことで事態が動き、男たちが逮捕されたのはラッキー。しかして、彼らが保釈されるまでの2日間、女たちは上記3つの選択肢から1つを選ばなければならないわけだ。最初に女性全員による投票が行われた結果、①が少なく、②と③が同数となったため、議論はさらに白熱していくことに・・・。

■□■論者が多すぎ！議論が難解！ついていくのは大変！■□■

近時、対話劇を中心とした舞台劇のような名作映画がたくさん誕生している。銃乱射事件の被害者と加害者の両親4人の対話劇を描いた『対峙 (MASS)』(21年) (『シネマ52』77頁) もその1つだが、そこでの計4人の議論は見応え (聞き応え) 十分だった。

それに対して、本作の対話 (議論) は、①赦す派、最年長のスカーフェイス・ヤンツ (フランシス・マクドーマンド)、②闘う派、最年長のアガタ (ジュディス・アイヴィ)、③去る派、最年長のグレタ (シーラ・マッカーシー) の3派が、それぞれ自己の主張を展開する上、それぞれの派に属する娘や孫や姪たち合計10名以上が、次々と自分の意見を表明していくから、あまりにも論者が多すぎ！さらに、その議論はあまりにも難解！これでは、出演者たちの顔と名前そしてキャラが容易に一致しない日本人の観客が、この議論についていくのは到底無理だ。男性ながら唯一人だけ記録係として出席している、一度コミュニティから出て、大学で学んで帰郷した教師のオーガスト (ベン・ウィショー) は、これらの議論をすべて理解し、記録できているようだが、日本人観客には到底無理だ。

本作はアカデミー脚色賞を受賞した名作だが、そんな根本的な欠陥があることを指摘しておきたい。

■□■議論の期限は？闘う派の論拠は？■□■

本作は10人以上の女たちが三派に分かれた議論を展開する“対話劇”だから“舞台劇”の魅力を持っている。他の有力候補作を押しつけてアカデミー脚色賞を受賞した理由はそのところにあるはずだが、残念ながら、日本人の私たちには、第1に、議論が難解なため分かりにくい、第2に、前述のように論者が多すぎるためその議論についていけないのが難点だ。しかし、本作についての疑問はそれだけではなく、次の2点にもある。

その第1は、議論の期限が、保釈金を払うため街に出かけていた男たちが村に帰ってくるまでの2日間と限定されていること。近代刑法や近代刑訴法に慣れている弁護士の私には、どうしてもそんな2日間の設定が理解できない。第2に闘う派として強硬な主張を展開する女たちの迫力と執念は十分買うものの、彼女たちの意見をいくら聞いても、闘うための具体論が私には全然見えないことだ。銃で闘うの？それとも、包丁や鎌で戦うの？それとも毒殺・・・？あくまで闘うと主張する以上、その具体論 (戦術論) がなければ無意味なはずだが、さて・・・？

私のそんな疑問が解消されないまま、女たちの長く続いた議論はそれなりに集約され、“ある結論”に達したようだが、さてそれは？

■□■この結論に納得？これはまるで「出エジプト記」！■□■

旧約聖書の「出エジプト記」を映画化した名作中の名作が、セシル・B・デミル監督の『十戒』（56年）。そこでは、イエス・キリストに導かれて数々の奇跡を起こす預言者モーゼに率いられたユダヤの民が大挙してエジプトを離れる（去る？脱出する？）ストーリーが描かれていた。そんなモーゼの行動を許さないエジプト王が、延々と隊列が続く“モーゼ御一行”を戦車で追いかけてきたのは当然だが、同作ラストで見る、海が割れるシーンは当時としては想像を絶する大スペクタクルシーンだった。

キリスト教の根本思想は愛。愛がすべてに優先するから、悪人でも愛で対応するのが原則だ。聖書では「右の頬を打たれたら左の頬を出せ」と教えているから、私は最初から三派に分かれた女たちの議論は“赦す派”が多数になるのかと思っていた。ところが、赦す派は最初に少数となり、闘う派 VS 去る派に二分されて激論が続き、結局最後に勝利したのは去る派だったから、私には少し意外。しかし、「出エジプト記」と同じように、すべての女たちが男たちに知られないまま村から去っていくのは容易なことではない。女たちはそれをどうやって実行するの？

私には、闘う派の戦い方が分からないのと同じように、“去る派”についても、去る方法についての具体論が見えなかったが、本作ラストに見るその実行策は「出エジプト記」を彷彿させる大規模なものになるので、それに注目！しかして、それを可能にした女たちの戦略、戦術は如何に？それは、あなた自身の目でしっかりと。

2023（令和5）年6月7日記